



VOICE

「え？ 何か言った？」 「いや、何も」 彼は答えた。そう…
 確かに声が聞こえた。誰もいないはずなのに。私はあたりを見廻した。部屋はいつもと変わりなく、窓は閉まっている。あのカーテンの陰に誰かが？
 「なんだい？ 幻でも見たって言うの？ 誰もいないよ」 やっぱり…
 あなたと私の間に、誰かがいる。
 「まったく今日の君は変だよ。何が聞こえるっていうの？ 夢でも見たんじゃないの？ さあ、僕はもう帰るからゆっくり休むといいよ」 私は一人になった部屋をもう一度見廻した。
 誰もいないはずなのに何か見える。うっすらと影のようなものが… あ、また、確かに、今度は確かに、聞こえる。あの声が。
 『ふざけんじゃないわよ…』
 声は、小さく、消え入るようにささやいている。
 『冗談じゃないったら、まったく、いい加減にして欲しいわ。私のことも少しは考えてよ。いつだって一人にして、こんな所に一人ぼっちにしないでよ…』
 ああ、やっぱり聞こえる。聞き覚えのあるあの声が。声は情けないくらい悲しげに自分を一人にしないでくれと訴える。ふと、思った。寂しいんだわ。この声も…
 それからというもの、毎日のように耳もとで声がある。歩いているときも、食事をしている時も、本を読んでいる時にも。声は、時には機嫌よく鼻歌まじりに話し掛けてもくし、友達との会話に合槌をうってきたり、TVのチャンネルに注文をつけたりもする。勝手に一人歩き回り、しゃべったり見たりする。そして、最後にはいつものように部屋の隅の椅子に腰を掛ける。声は、いつでも私と一緒にいる。影のように。
 しばらくすると、私は少しずつ気づき始めていた。その声の正体が、何なのかを、いつしか声はあたり構わずどんどん口汚くなってきた。下品でずうずうしく、ひとりよがりにも不平をまきちらす。声は日に日に大きくなってきた。誰にもはっきりと聞こえるくらいに。そして、声の主は声だけでなく、ぼんやりと姿を見せ始めてくる。私とほとんど変わらない背丈、髪のかたち、横顔…鏡のように…声は声でなく、私の影となった。
 私の影としてどこにでも現われる。そして、影はまるで私そのものとして主張する。いずれは、その正体を光の下にはっきりと現すだろう。その時、私は、私自身の影にとって代わられる…

COLUMN

鎌倉の猫事情 第二十二話

初めの頃は違和感のあった鎌倉の町を横行する人力車も、少しずつ町の風景に溶け込んできたような気がします。鎌倉は毎日変化しています。この町に住む人達は少しずつ変わっていく町の様子にとまどいを感じながらも、少しずつ慣れていくようです。細く曲がりくねって家々の間を通る裏路地は、まだまだ昔のまま残っている風景の一つです。いつも人で賑わう小町通から路地を少し入ったところに、長年使われなかった古い家がありました。その家の庭に何本かの古い木があり、一番大きな木は路地にのしかかるようにごつごつとした枝を伸ばして、毎年初夏になると赤い綺麗な花を枝いっぱいにつけました。その時には細い路地が花のトンネルのようになって、通る人達を楽しませてくれていたのです。が、長年放置された家でした。つい最近取り壊され、その路地も少し寂しくなりました。

さて、我が家のスィーピーにも少しずつ変化が表れはじめました。なんといっても食欲旺盛、ぶくぶくとぶくぶくかなお腹を時々大切そうになめています。うーん、間違いなくお腹には可愛い赤ちゃんが育っているのでしょう。お店のスタッフ達も皆、楽しみずようになっていきます。初産ですから、こちらもなかなか気をもみます。それにしても、お腹がどんどん大きくなってなかなか産まれる気配がありません。そのうち、気をもむあまり、ただ太っただけじゃないのか？なんて声も出たりしました。しかし、押し入れの中に作ってあげたお産用の箱の中に注意深く入ったり出たりしているのを見ると、やはりお産間近の特徴なのだと思います。そして、ある春の日の午後、とうとうスィーピーがはっきりとした意思表示を示しました。私はその時、自室に大きな机を置いて、その日の5時までに必要な仕事に取りかかっていた。その私の足元に来て、スィーピーが大きな青い目を私に向けて、「これから産みます」と言ったのです。確かにそう言っていました。

私は慌てたものの、私自身も大忙しの時です。今はまだ午後3時になったばかり、子供は猫も人間も夜産むものと決まっていますから、多分今夜なのだろうと考えて、せっぱつまった仕事を続けました。



それでも、スィーピーは私の顔を見て訴えています。不安そうです。「ごめんね、今はちょっと忙しいの」と、言うときスィーピーは、一人で押し入れに入っていました。私はそれからまだ小一時間ばかり心に机に向かっていましたが、ふと気づくと背後から何か聞こえています。…何か小さな泣き声。まさか？！押し入れに駆けつけて中を覗くと、スィーピーが目を細めて小さな白い塊にお乳をやっています。え？！ だってさっきから一時間も経ってないよ？
 なんだか胸がどきどきします。ああ、でももうすぐ5時…出掛けなくちゃ。これは一体、どうしたら、いや、別に何もすることはなさそうだけど…
 こちらのほうがすっかり慌ててしまいました。

to be continued

